

思いの外設置されている。そして面白いもので（東京23区内の宅地化され尽くした都市部でも）、これら井戸ポンプからは時におびただしい数の地下水性甲殻類が出てくる。

私は当初、この状況を「地上の環境破壊の影響が地下に及んでいない故」のものと考え、楽観視していた。しかし最近、肥料の過剰使用などに伴い、地下に浸透する栄養塩の増加が地下水の赤潮化（富栄養化）をもたらす可能性のある事を知った（例えば松本1956；篠田2006；柳・秋田2025）。この状況下にある地下水では、甲殻類が異常に数多く検出される一方、酸素が豊富に溶け込んだ地下水でしか生きられない甲虫類が得られなくなるらしい。もしかしたら、都心部の井戸から多数の甲殻類が現れるのは、環境がよいからではなく、むしろ地下水の有機的な汚染が進行しているシグナルではないか。事実、地下水性甲虫と同じく豊富な水中の溶存酸素を必要とするミズダニ類を、私は都内の井戸で出したことがほほえないのだ。今まで、都内だけでもトータルで50箇所以上の井戸ポンプを、通算10万回以上は漕ぎ続けているのに。

地下水性生物は、その採集の難しさ故に今日でも、そして国内においてもその種多様性の全貌が見えない。井戸ポンプを方々で漕ぐ度に、これまでに知られるどの生物種とも似ていないもの（図6）が出てくるのも日時茶飯事だ。今後、地下水汚

染の進行とともに、減じる種も少なからず出るに違いない。それまでに、私は1種でも多くこの不思議な生物達を、人類の眼前に引っ張り出す事ができるだろうか。時間との戦いである。

※2020年、IUCN（国際自然保護連合）は新型コロナウイルスの蔓延を受けて、全ての野外研究者に対して野生コウモリへの接近を伴う調査研究の自粛を求める声明を出した。

引用文献

- 今村泰二（1977）日本の地下水生ミズダニ類の研究展望。ダニ学の進歩—その医学・農学・獣医学・生物学にわたる展望（佐々學・青木淳一編）。北隆館，東京。9-81。
- 北山昭（1996）地下水生ゲンゴロウ採集覚え書き。ねじればね 73, 1-3。
- 松本浩一（1956）井水から検出する生物の分類とその水質汚染指標としての意義（第一報）。東京都衛生研年報（6），81-108。
- 篠田授樹（2006）東京都の湧水等に出現する地下水生生物の調査。河川財団助成事業報告書。
- 柳 丈陽・秋田勝己（2025）高知県におけるオオメクラゲンゴロウ幼虫の記録と日本産地下水生ゲンゴロウ上科の生態に関する知見 月刊むし 647, 40-50。

「うみうしくらぶ」および財団賛助会員報告

現在の会員状況について報告いたします（12月1日時点）。

- ・うみうしくらぶ会員：個人会員 221名，法人会員 8団体
 - ・賛助会員：30名（2025年の寄付金額は合計 175,000円）
- うみうしくらぶ会費および寄付等により、うみうし通信の発行や観察会などの活動は成り立っております。いつも温かいご支援ご協力をいただき誠にありがとうございます。引き続きよろしくようお願い申し上げます。

うみうしくらぶ会員の方で、今年度の会費が未納になっておられる方は、年度内の納入にご協力をお願いいたします。

また、送付先住所等の変更がありましたら、事務局（maininfo@rimi.or.jp）までご連絡ください。

※新規会員も募集中です。

（詳細は財団 HP：<https://rimi.or.jp> をご覧ください）

編集後記

表紙のウミウシはクセニアウミウシ属のムロトミノウミウシ *Phyllodesmium macphersonae* です。同じ属には比較的良好に知られているサガミノウミウシが含まれています。表紙の画像では少し分かりにくいかもしれませんが、体の背面にある茶褐色の細点には褐虫藻が共生をしているそうです。名前から連想される高知県の室戸と関連があるのか気になって調べてみたところ、この種は1991年に馬場菊太郎先生によって、日本から初めて報告されましたが、その採集地が高知県の室戸岬となっていました。地名が和名や学名の由来になっている種もいますので、種名をながめてみるのも面白いです。

今年、あるウミウシ観察会に参加した際に、海藻に付く小さなアリモウミウシのを見つけ方を教えていただきました。その後、調査で海藻を探してみたところ、アリモウミウシのほか、ヒラミドリガイ、クロミドリガイなど複数の種がさまざまな海

藻から見つかりました。海藻にはウミウシ以外にも、ワレカラやヨコエビ、小さな貝、ヒドロ虫やコケムシなどがたくさん付いていて、動物のマンションのようです。重要な生き物の生活の場になっているのだと改めて感じました。機会があれば、海の中でそっと海藻を広げて観察してみてください。そこには小さな生き物たちの世界が広がっているかもしれません。

早いもので、2025年最後の号になりました。今年も無事に発行することができたのも、著者や会員の皆さま、読者の皆さまのおかげです。「『うみうし通信』を見ているよ、こうした情報の雑誌は多くはないので、ぜひ続けてほしい」とのお言葉をいただくこともあり、大変嬉しく励みになります。できる限り皆さまにお届けできるよう発行していきたいと思っております。2026年もどうぞよろしくお願いいたします。